

Vol. 4, No. 2, 1974

目 次

解 説

第2回 磁気テープ(MT)の使い方

B $\bar{O}$ Sの場合..... 車 古 正 樹 ..... 1

B $\bar{O}$ S IIの場合..... 都 築 輝 昭・河 野 芳 輝 ..... 8

I/Oチャンネル.....13

会 議 報 告

運営委員会.....14

連絡委員・プログラム相談員合同委員会.....14

速報・再録.....14

原稿募集要項・編集後記.....16

DATA PROCESSING CENTER  
KANAZAWA UNIVERSITY

## 第 2 回

### 磁気テープ(MT)の使い方

磁気テープ(これ以後MTという)の利用方法についてマニュアル等を調べても、初心者にとっては理解し難く、またどのようなとき効果があるかわかりにくい。ここではMTの利用方法についてのその種類、利点、そしてその使い方について述べることにする。

#### BOSの場合

計算機センター 車 古 正 樹

##### 1. MTの使い方の種別

MTの使い方は大きく分けてプログラム・ファイルとデータ・ファイルの2種類がある。前者は、各種プログラムをカード・ファイル(あるいは紙テープ)よりMTに移し変えたものであり、後者はプログラム内で使用したいデータを記憶しておくものである。前者のプログラム・ファイル形式としては次の3種類になる。1番目はソースプログラムそのものを記憶、2番目は相対形式としての記憶、3番目は実行形式としての記憶である。それらの使用目的は1番目は、プログラムをソースとしてながく保存したいとき、カード・ファイルだと量が大きくなりまたその保存も難かしいので一般にMTに記憶しておく。2番目の相対形式による記憶は、汎用性のあるサブルーチン等を記憶しておくときよい。一度記憶されるとそのサブルーチンに関して毎回の翻訳の必要もなく時間の節約になり、また多くのプログラムで使用するときもプログラム毎にそのサブルーチンを準備する必要なく、結合も非常に簡単であり労力の節約になる。3番目の実行形式の記憶は翻訳、結合をすませ実行できる型に変換したプログラムを記憶させるものであるから完成されたプログラムでデータが発生する毎にそれを処理したい時に用いるときよい。この形式でプログラムを実行させるとカードの読み取り、翻訳、結合の時間の節約になる。後者のデータ・ファイルとしてMTを用いる場合には次の様なときである。1番目として、大容量のデータを何度も使うとき、2番目には、中間のデータを記憶させそれを次の回に使用するための媒体とするとき、3番目は、コア容量が足りず補助記憶として使うためのときである。

##### 2. MTを使うときの注意

MTを使うときの注意としてまず最初を知っておくべきことはそれらの操作概念と機番についてである。それを図1で示す。

操作概念は図からわかるようにMTの書き込みとして操作命令に¥STÖRE, ¥LIEDがありプログラム部分ではファイル名をÖBJといいそのボリューム名としてMT-B $m$ と書く。ここで $m$ は1~5のいずれかを指定すればよい。またフォートランの実行における書き込みはWRIT Eでありその論理機番 $m$ は1, 2, 3のいずれかである。

また呼び出しはプログラム部分では操作命令に¥LÖAD, ¥LIEDでありファイル名はL I Bといいそのボリューム名は書き込みのときと同じである。また実行時における呼び出しはREAD命令で論理機番はWRIT Eのときと同様である。MTに初めて書き込むとき、またはクリアして書き込むとき必ずそれをイニシャライズ(MTのファイル名等の書き込み)しなければならない。

¥FÖRTRAN

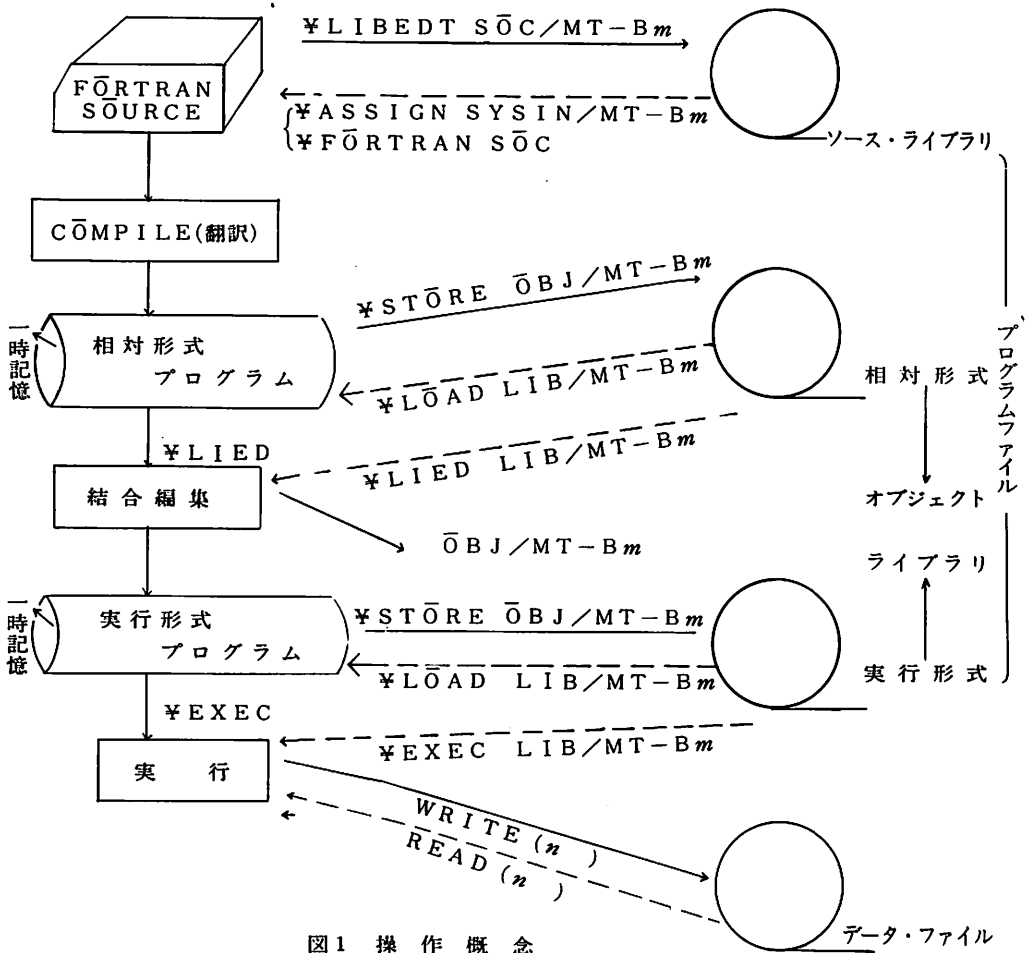


図1 操作概念

+

3-1 ボリューム管理操作命令

MT全体を管理するものである。初期値設定、複写、比較等がある。

- a) 初期値設定……………この命令はMTを初めて使うとき必ず必要とする。

¥VÖLINT□MT-B<sub>m</sub>=ボリューム通番〔所有者名〕

ボリューム通番; 1~6桁の10進数

所有者名; 10文字以内の英数字

m; 機番 1~5のいずれか

- b) 複写……………この命令はMTのコピーを必要とするとき使用する。

¥VÖLCPY□MT-B<sub>m1</sub>, MT-B<sub>m2</sub>

m<sub>1</sub>; 出力磁気テープの機番 1~5のいずれか

m<sub>2</sub>; 入力磁気テープの機番 1~5のいずれか

3-2 結合編集操作命令

ライブラリの格納、呼び出し、結合、実行等を行う。

- a) 実行……………プログラムの実行を行ないたいとき



ライブラリ内のメンバ名と内容を印刷する。

¥LIBLST □ {  $\begin{matrix} \text{S} & \text{O} & \text{C} \\ \text{O} & \text{B} & \text{J} \end{matrix} \}$  /MT-B  $m$ , メンバ名, ……………

$m$  ; 機番 1~5のいずれか

メンバー名; 省略されたときはライブラリ中のメンバー名を印刷する。メンバー名が書かれているときはメンバーの内容とすべてのメンバー名が印刷される。但しO B Jのときはメンバー名は書けない。

c) ライブラリの削除

旧ライブラリより指定されたメンバー名を削除して新ライブラリを使う。

¥LIBDLT □ {  $\begin{matrix} \text{S} & \text{O} & \text{C} \\ \text{O} & \text{B} & \text{J} \end{matrix} \}$  MT-B  $m_1$  /MT-B  $m_2$ , メンバー名, ……………

$m_1$  ; 新ライブラリの機番 1~5のいずれか

$m_2$  ; 旧ライブラリの機番  $m_1$ 以外の1~5のいずれか

メンバー名; 削除したいライブラリ名

4-4 プログラム・ファイルの使用例

プログラム・ファイルにソース・ライブラリとオブジェクト・ライブラリがあり共用することは出来ないので注意する必要がある。ここでは各々の使用例をいくつかあげていくことにする。

例1 完成済みのプログラムが3個あり、これをMTにソース形式で保存したい。

プログラム名はTST1, TST2, TST3, としたい。どうすれば良いか。

解) ¥J O B

¥CAT……………

NAMEカード

/END

¥V O L I N T □ MT-B 1, 7 4 0 6, P R O G

¥L I B E D T □ C O D E - 1, S O C / M T B 1, S I N

/F I L E □ T S T 1, F O R I R A N, N C, T O 1

TST1のプログラム

/F I L E □ T S T 2, F O R T R A N, N C, T O 2

TST2のプログラム

/F I L E □ T S T 3, F O R T R A N, N C, T O 3

TST3のプログラム

/END

となる。V O L I N Tは追加登録のときはおいてはならない。

例2 上記のソース・ライブラリにプログラム (CHK1) を追加登録し、同時にTST1とCHK1のソースリストを得るにはどうすれば良いか。

\*\*

¥V O L I N T □ MT-B 1, 7 4 0 6 1, P R O G

¥L I B E D T □ C O D E - 1, S O C / M T - B 1 / M T - B 2, S I N

/F I L E □ C H K 1, F O R T R A N, N C, C O 1

CHK1のプログラム

/END

¥LIBLST □SŌC /MT-B1, TST1, CHK1

となる。このときソースリストと共にソース・ライブラリ上のメンバー名がすべて印刷される。

- 例3 ソース・ライブラリにあるTST3のプログラムを実行するにはどうすれば良いか。また、データはカードとする。

\*\*

¥ASSIGN □SYSIN /MT-B1

¥FŌRTRAN □LIST, SŌC /TST3

¥ASSIGN □SYSIN /CR-C9

¥EXEC

データ

/END

となる。ソース・ライブラリよりプログラムを実行するにはASSIGN文を必ず必要とし、またFŌRTRANパラメータにもSŌC指定を置かねばならない。

- 例3 非常によく使うサブルーチン, SUB1, SUB2, SUB3, がある。これをオブジェクトライブラリに登録したいときどうすれば良いか。

\*\*

¥VŌLINT □MT-B2, 7306, ŌBJECT

¥FŌRTRAN.....

SUBRŌUTINE SUB1

SUBRŌUTINE SUB2

SUBRŌUTINE SUB3

/END

¥STŌRE □SUB1, ŌBJ /MT-B2

¥STŌRE □SUB2, ŌBJ /MT-B2

¥STŌRE □SUB3, ŌBJ /MT-B2

となる。これは必要な個数だけにコンパイルストア文で相対形式として各々が登録されていく。

- 例4 何回も使いたいプログラムがある。これを実行形式で上記のMTに追加登録したいときどうすれば良いか。また名前をMNPR1とする。

\*\*

¥FŌRTRAN.....

ソース・プログラム

/END

¥LIED □MNPR1, ŌBJ /MT-B2

- 例5 SSLを使用したプログラムを実行形式で追加登録したいときどうすれば良いか。

またこれを登録と同時に使用するにはどうすればよいか。また2回目以降の実行はどうするか。

\*\*

¥FÖRTRAN□NÖTP, .....

ソース・プログラム

/END

¥LIED□MNPR2, ÖBJ/MT-B2, LIB/DP-A1

同時に実行するにはこの直後に

¥EXEC

データ

/END

とすればよい。

2回目以後の使い方は

\*\*

¥EXEC□MNPR2, LIB/MT-B2

データ

/END

とする。

例6 SSLのSIMPSとオブジェクト・ライブラリに入っているサブルーチンを使って計算したいときどうすれば良いか。

\*\*

¥LÖAD□SINPS, LIB/DP-A1

¥STÖRE□SIMPS, ÖBJ/MT-B2

¥FÖRTRAN□NÖTP, .....

ソース・プログラム

/END

¥LIED□LIB/MT-B2

¥EXEC

但し、SIMPSを2回目以降使用するときは、¥LÖADと¥STÖREは必要ないので注意を要する。

例7 オブジェクト・ライブラリ中のMNPR1のプログラムを変更して登録しなおしたいときどうすればよいか。またMTを1本しか持たないときはどうするか。

\*\*

¥VÖLINT□MT-B1, ..... (新ライブラリー)

¥LIBDLT□ÖBJ/MT-B1/MT-B2, MNPR1

¥FÖRTRAN.....

新プログラム

/END

¥LIED□MNPR1, ÖBJ/MT-B1

またMTが1本しかない人はこの直後に

¥V̄ŌLCPY□MT-B2, MT-B1

とおき、MT-B1としてセンターのW̄ORK用MTを使って下さい。

例8 ソース・ライブラリにあるTST1プログラムを実行形式になおしてオブジェクト・ライブラリに登録したいときどうしたらよいか。またその後オブジェクト・ライブラリのメンバー名を確認したい。

\*\*

¥ASSIGN□SYSIN/MT-B1

¥F̄ORTRAN□S̄OC/TST1, .....

¥LIED□TST1, ŌBJ/MT-B2

¥LIBLST□ŌBJ/MT-B2

以上8つの例をあげて説明したがこれらをうまく使いこなせばプログラムの破損、計算時間の節約、カード作成の労力の軽減、ラインプリンター用紙の節約につながると思いますので多いに御利用下さい。また、データ・ファイルとしてのMTの使い方については次の機会に致します。

文献： F̄ORTRAN文法編

B̄OS操作手引書

サポートユティリティ文法編



## BOS IIの場合

理学部地学教室 都築輝昭, 河野芳輝

はじめに

BOSにおける磁気テープ(MT)の使い方についてはセンターの車古氏が報告されている。ここでは、BOS-IIにおけるMTの使い方の数例を解説する。以下に述べるものは全て実際に本センターの計算機にかけて正常に実行されることを確認したものである。現在BOS-IIは種々の事情で利用者も少ないが、大型計算機のOSにより近い機能をそなえているのでトレーニングとしても試用されるとよいと思う。なお、名古屋大学計算機センターのSYS-II(グラフィック・ディスプレイ、媒体変換、図形処理などを主とする)は本年5月からBOS-IIをOSとして使用しはじめた。カタログ文などで若干のちがいがあることに注意を要する。

### (A) MTの初期化

これから、新しいMTを使おうとする時や、今まで使っていたMTの記録を無効にして、新たに使おうとする場合には、初期設定(ボリューム イニシャライズ)をする必要がある。そのためには、初期化したいMTをMT01装置にかけたとすると、

1. JOB依頼カード(の備考欄にMT-01(MTの名前))\*などと記入する。

\* 以下のMTを用いたJOBでは全て、JOB依頼カードの記入が必要であり今後、この部分を(\*)と略記する。

2. コントロールカード

¥ □ JOB

¥ □ FDL □ SYSLST, LP00

¥ □ VOL □ INIT, MT01, VOL=123456, OWNER=KANAZAWA, NEW

¥ □ JEND

数字123456はボリューム通番で6桁以内の数字、KANAZAWAは所有者名で英字で始まる10文字以内の文字列である。これらの内容がMTの最初の80bytes(ボリューム・ラベル)中に書き込まれる。

なおBOS IIでは¥の直後に必ず1つの空白を入れなければならない。これはBOSとは異なるので注意すること。

### (B) プログラムを相対形式(Relocatable Binary)でMTに保存する場合

例えば、長いプログラムのデバッグの段階で、いくつかのサブプログラムは完成しているが、メインプログラムあるいは一部のサブプログラムだけの修正が続いているという事はしばしばある。このような時、JOBの度ごとに、多数のソースカードをカードリーダーから読みこむのは、コンパイル時間も無駄であるし、エレガントな方法とは言えない。この場合には、完成した部分のサブプログラムは全て相対形式(ソースプログラムを翻訳した形式)でMTに保存しておいて、そのつど、このMTと結合すると大変便利である。

いま、メインプログラムとSUB1, SUB2というサブルーチンから成るプログラムがあるとして、SUB1とSUB2をコンパイルし、相対形式のプログラムをMT01装置にかけたMTに書き込むためには、

1. JOB依頼カード(\*)

2. コントロールカードは

¥ □ J O B	(B-1)
¥ □ F D □ S Y S L S T, L P 0 0	(B-2)
¥ □ F D □ E L I B, D R 0 0	(B-3)
¥ □ F D □ O L I B, D P 0 0, F I L E = O L I B	(B-4)
¥ □ F D □ R L I B, M T 0 1	(B-5)
¥ □ F D □ S Y S W R K, D P 0 0, F I L E = S Y S W R K	(B-6)
¥ □ E X □ F O R T R A N	(B-7)

SUB 1

SUB 2

¥ □ J E N D

ブランクカード1枚

ここで、(B-3)、(B-4)、(B-6)、(B-7)は、現在では、ひとまとめにして ¥ C A T …………… 文に納められているものであるが、このカタログ文は便利であるが、J O B の内容を変更することはできない。したがって、その必要のある J O B を行なう場合には、以前のように展開された形の制御文を書く必要がある。上の場合、(B-5)の制御文によって、R L I B (Relocatable Library)を M T 0 1 に出力することを指定する文がつけ加わっている。

次に、メインプログラムのエラーがわかり、それを修正したのち、M T にあるサブプログラムと結合して、計算を実行させたいときには、

1. J O B 依頼カード (\*)
2. コントロールカード

¥ □ J O B	(B-8)
¥ □ F D □ S Y S L S T, L P 0 0	(B-9)
¥ □ C A T □ D P 0 0, F. C A T, F O R T C	(B-10)

メインプログラム

¥ □ E X □ L I E D	(B-11)
¥ □ F D □ U 0 3, D P 0 0, F I L E = U S. C L I B	(B-12)
¥ □ F D □ U 1 0, M T 0 1	(B-13)
/ P A R A □ O U T = F. F T M A I N, U S C A L L = U 0 3	(B-14)
/ I N P U T □ R L I B	(B-15)
/ S E G □ F. F T M A I N	(B-16)
/ S E L E C T □ F T M A I N	(B-17)
/ I N P U T □ U 1 0	(B-18)
/ S E L E C T □ S U B 1	(B-19)
/ S E L E C T □ S U B 2	(B-20)
/ E N D	(B-21)

あればデータ

ブランクカード2枚

とすればよい。

(B-8) ~ (B-10) はメインプログラムをコンパイルするためのものであり、ふつうのJOBと全く同様である。(B-11) 以下の文はSSLを使うときの考え方で、ほぼ同じである。

(B-15) で入力をRLIBに指定しておいて、いま、コンパイルされたFTMAINとSUB1とSUB2を組み込み〔(B-17), (B-19), (B-20)〕全体をまとめてF. FTMAINという名前のセグメントを作る〔(B-16)〕。その際、SUB1, SUB2はU10即ち、(B-13) で定義されたMT01から入力される。このようにしてできたF. FTMAINという名前のプログラムを実行する〔(B-22)〕。また、MTにないサブルーチンをつけ加えたいときは、(B-17) の後に /SELECT (サブルーチン名) を加え、MTに多数のサブルーチンが登録されている場合には使用するものだけを、(B-20) の後に順次 /SELECT 文をつけ加えればよい。

(C) ŌLIB形式でMTに保存する場合

これは、メイン、サブプログラムともに全部完成し、あとはデータだけを交換して、計算を行いたいというときに便利な方法である。このような場合、BOSでは実行形式 (Executable Binary) のプログラムをMTに登録すればよいが 注) BOS II の場合には、ソースプログラムを翻訳 (Compile) してできる相対形式のプログラムはLIEDを実行しても、直接実行形式のプログラムにはならないで、ŌLIB形式 (相対形式) として出力される。このプログラムをEDITして実行の先頭番地 (Starting Address) が決められて、はじめて実行形式になる。ŌLIB形式から実行形式への変換時間は、ほとんど瞬間的であるので、実用上は、これを実行形式のプログラムと思ってさしつかえない。

MTをMT01装置にかけ、これにF. FTMAINという名前のŌLIBを登録するためには、

注) BOS II においてもプログラムを実行形式で登録するのは容易であるが、今回は省略する。

1. JOB依頼カード (\*)
2. コントロールカード

- |                                |       |
|--------------------------------|-------|
| ¥□JOB                          | (C-1) |
| ¥□FD□SYSLST, LP00              | (C-2) |
| ¥□FD□ELIB, DR00                | (C-3) |
| ¥□FD□ŌLIB, MT01                | (C-4) |
| ¥□FD□SYSWRK, DP00, FILE=SYSWRK | (C-5) |
| ¥□EX□FŌRTRAN                   | (C-6) |

メインプログラム  
サブプログラム

```

¥□EX□LIED (C-7)
/□PARA□OUT=F, FTMAIN, ALL-MOD (C-8)
/END (C-9)

```

ブランクカード2枚

(C-3) ~ (C-6) の部分は ¥ CAT.....文に納められている個所であるがこのカタログ文を使うと、OLIBはDP00 (ディスクパック) に出力される。今の場合、これを MT01 に変えたのである。

このようにして登録されたOLIBを実行するためには、

1. JOB依頼カード (\*)
2. コントロールカード

```

¥□J□OB
¥□FD□SYSLST, LP00
¥□FD□OLIB, MT01
¥□EX□F, FTMAIN, OLIB

```

もしあればデータ

ブランクカード2枚

とすればよい。

上記の方法では、1本の磁気テープに1種類のプログラムしか登録できないが、多数のプログラムを登録することも可能である。その方法については追って報告する。

#### (D) データファイルとしての使用法

これはデータをカードリーダーから読んだり、結果をラインプリンター用紙に出力する変わりに、MTからデータをインプットあるいはMTへアウトプットする方法である。この場合には、FILES文 (D-4)、とFD文 (D-6) が必要である。今、MTをMT03装置にセットし、結果を出力する場合には

1. JOB依頼カード (\*)
2. コントロールカード

```

¥□J□OB (D-1)
¥□FD□SYSLST, LP00 (D-2)
¥□CAT□DP00, F. CAT, FORTC (D-3)
    FILES□30-MT (BL=256) (D-4)
    DIMENSION X(10)
    . . . . .
    WRIE (30, 100) A, B, C
    100 FORTM ( . . . )
    . . . . .
    END
¥□CAT□DP00, F. CAT, FORTLG (D-5)
¥□FD□U10, 30, MT03, FILE=KANAZAWA (D-6)

```

もしあればデータカード

ブランクカード2枚

となる。

(D-1) ~ (D-3) 及び (D-5) の制御文は、ごく普通の J O B に用いるステートメントである。(D-4) の F I L E S 文はメインプログラムの先頭に置かれ、上の例のように書いた場合、ファイル参照番号は 3 0 となり、これによって 3 0 番の媒体に出力できる。

(B L = 2 5 6) は M T に書き込まれるデータのブロック (計算機が 1 回 W R I T E 命令に出会うごとに出力する単位、R E A D 命令についても同様) の大きさが 2 5 6 bytes であることを示す。2 5 6 bytes は通常の入出力 (L, P. では 1 3 6 bytes) の標準サイズであり、この場合には省略して、F I L E S 3 0 と書いてもよい。(F I L E S 文については B O S II 文法編参照) F D 文 (D-6) 中の U 1 0 は M T 0 3 のアクセス名、3 0 はファイル参照番号である。また、このとき M T には K A N A Z A W A というファイル名が書き込まれる。

B O S II では、上述のように、M T のファイル名を識別する機能がある。しかしながら、B O S あるいはその他の計算機で書かれた M T でファイル名がついてなかったり、わからないテープを B O S II で使うためには、M T の最初に書かれているボリュームラベル、H D R 1, H D R 2 ラベルを読みとばす必要がある。そのためのプログラムは、

```
1 0  R E A D ( 3 0 , 1 0 0 , E N D = 9 0 0 )
1 0 0  F O R M A T ( 8 0 X )
      G O T O 1 0
9 0 0  C O N T I N U E
C   * * *   K O R E D E M T   K A R A   Y O M E R U
      . . . . .
```

とすればよい。また、F D 文は (D-6) に換えて

```
¥ □ F D □ U 1 0 , 3 0 , M T 0 3 , F I L E = / N L           ( D - 6 )'
```

として、F I L E が Non Label であることを指定すればよい。

#### (E) M T の D U M P

M T に書き込まれているファイル名、ブロックサイズ、及びデータの内容を知りたい場合は、ダンプリストをとれば良い。そのためには、M T を M T 0 3 装置にかけたとして

1. J O B 依頼カード (\*)
2. コントロールカード  
¥ □ J O B  
¥ □ F D □ S Y S L S T , L P 0 0  
¥ □ V O L □ D U M P , M T 0 3 , B L O C K = | 出力したいブロック数 |  
¥ □ J E N D

ブランクカード2枚

とすればよい。

おわりに

蛇虫ながらMTの経済性について若干の経験例を述べておきたい。市販のMTの大きさには、3種類あり ①Full Size(3200ft) 約7,000円, ②Half Size(1600ft) 約5,000円, ③Quarter Size(800ft) 約4,000円である。カード数百枚程度のプログラムをMTにストアーする場合には③のQuarter Size で十分である。たいていのプログラムはMTが数回転するうちにはストアーされてしまう。人間が手でつくったデータも同様である。しかし、測定機器がはき出すデータや計算結果などでは事情がちがってくる。FORMAT付きでMTにデータを入れると、一例としてE12.5 でつめた時、約70,000個ではほぼQuarter SizeのMTがいっぱいになる。同じデータをカードで打出したとすると(80カラムFullにつめて) Quarter Size MT 3本分のカード代がかかることになる。したがってFORMAT付きであっても、MTはカードにくらべ経済的にすぐれている。さらに入出時間とカサをとらないことをみてもMTの方がすぐれている。MTにもっとコンパクトにデータをつめるにはバイナリーにおとしてやるのがよい。しかし、この場合ハード依存性がより強まるので、データの交換、他の計算機での計算などを予定している場合には、あまりすすめられない。バイナリーにすると3倍ほど濃縮できる。

## I/Oチャンネル

### BOS IIの勧め

BOS IIは従来のBOSに比べて計算機を使い易くしたものだといえる。すなわち、演算は速く、エラーの場所がはっきり示され、BOSでしばしば経験するようなERROR... (CONTINUE) を何十ページにもわたってベツリ打出すこともない。しかも論理ミス発見のためのデバッグ文が利用でき、おまけに今のところ当センターでは計算の制限時間をきめていない。難点はこのような好都合のためにモニター領域が多くとられて、大容量の計算ができない点であるが、デバッグの段階では問題にならないと思う。だからプログラムの作製はBOS IIで、本番はBOSで行うというのが能率的ではなからうか。

利用法は簡単、ともかく天下り式にコントロールカードをつけかえ、申込カード2枚にBOS IIであることを明記するだけ。そこで、新たに利用しようとする人に、マニュアルを読んだだけでは気がつかない注意事項を2つ。BOS IIに対して、通常ひんぱんに利用されているシステムはBOSと呼ばれBOS Iとはいわない。またコントロールカードについて、BOSの場合 $\yen$ のすぐ次に必要事項をパンチするが、BOS IIの場合 $\yen$ の次は1スペース空けることになっている。

それではせいだして御利用下さい。

(M, S)

— 会 議 報 告 —

連絡委員・プログラム相談員合同委員会

昭和49年7月11日(木)

1. 運営委員会の報告
  2. カードせん孔機1台購入したが、使用時間は2時間で教職員優先とすることになった。
  3. 現在OPEN使用の資格者は9名いるが、今からOPEN使用の資格を得ようとする者はなるべく後期に入る前にして欲しいとセンター長より要望があった。
  4. 大型センターのDEBUG旅費利用について京都地区協より1人あたり月1回にしてほしいと通知があったので、協力していただくようセンター長より報告があった。
  5. 大型センターへのジョブ発送は現在週2回(火・金)送っているが、この他に2,000枚入りのカード箱に一杯になった時にも発送することになった。  
又、個人で発送することも可能だが京都大学の場合のみ添付書類が必要なのでセンターまで連絡してほしい。
  6. センター長よりパンチ室に入る実習生の数を各10名以内になるよう要望があった。
  7. センター増築の際やむを得ず計算機を止めなくてはならない時があるかもしれないが、事前に通知し止めることで了承を得た。
  8. 分室のVTRの利用が少ないので、利用してほしいと分室長より要望があった。
- 問. 今年度の概算要求は何がとおったのか？
- 答. センター増築分と計算機維持費であり、その他として工学部より光熱水費とせん孔機維持費である。
- 問. ここの計算機結果を磁気テープに出力し、それを大型センターへかけることができないか？
- 答. 検討してみる。

運 営 委 員 会

昭和49年7月22日(月)

1. センター長より連絡委員会の報告があった。
2. 今年度の予算について説明があった。
3. 元如さんの件について分室長より説明があり、了承を得た。
4. 今年度の業務報告がセンター長よりあった。
5. その他諸問題について討議した。

速 報 ・ 再 録

1. FORTRANプログラム講習会

	日 時	内 容	講 師
第 1 回	7月11日～13日 (3日間) 9時～12時	FORTRAN 初級一般	センター 車古 正樹
第 2 回	9月6日～7日 (2日間) 9時～12時	主にサブルーチン (初級)について	センター 車古 正樹

2. 大型センターへのジョブの発送について

現在、週2回（火・金）の発送ですが、その外に7月15日よりジョブが多くなった場合、（2,000枚入りのカード箱に一杯になった時）にも発送することになりました。ただし普通便になります。

3. 工学部・土木工学科 吉田 博助教授より、東京大学大型センターの利用方法等について  
お知りになりたい方は、知っている範囲内においてお答えいたしますので、お問い合わせ下さるよう通知がありましたので、お知らせいたします。

4. 第4回公開講演会

日時：昭和49年9月24日(火) 午後2時～4時30分

会場：工学部12番教室（1階）

演題・演者

1. 数値計算の常識

名古屋大学工学部

二宮 市三

2. 学術情報への大型計算機の関与について

名古屋大学大型計算機センター長 成岡 昌夫

5. 現、保管カードラベルは今月いっぱいまで期間切れになりますので、新しい保管ラベルを受け取ってもらって10月5日(土)までに付けかえて下さい。なお、10月5日以降も保管カードラベルの更新されていないもの、あるいは保管カードラベルの無いものは、利用者の該当講座へ返却しますので御了承下さい。

広報 Vol. 4, No1 正誤表

ページ	行	箇所	誤	正
9	下から20		ディメンツオン	ディメンション
10	下から2, 3	一行アキ		この部分削除
24	上から7		理・化学	理・地学
33	上から3		河野(564)	河野(568)



## 原稿募集要項

1. この広報を有用なものにするため、つぎのような原稿を募っておりますので、積極的なご協力をお願いします。
  - a 計算機に直接・間接に関係する随想・論説
  - b 計算機を利用した研究・開発の紹介とプログラミング技法
  - c I/Oチャンネルに載せる情報、利用者・非利用者の声
2. 原稿用紙は規定のものを用意しておりますので、広報委員かセンターに申し込んでください。
3. 原稿は、各キャンパスの広報委員にご提出ください。計算機センターを通していただいても結構です。投稿について不明の点がありましたら、広報委員にお問い合わせください。

## 編集後記

いまやスポーツ、勉学の秋もたけなわ、グラウンドでは古いも若きもボールとたわむれ、昨今の物価高もどこ吹く風といった感じです。広報も負けじとばかり前号は昨年を上回るボリュームでした。連載記事「パターン認識と学習」を編集の都合により本号で皆様にお届けできなくなったことを深くおわび申し上げます。

今回の解説は前号に続き、利用者の手引きの意味で再度「MTの使い方」を取り上げました。今まで大きなカードデッキを持って計算依頼をされていた方、うまく利用されると少量のカードで済みます。これを機会に利用されてはいかがでしょう。

なお、センターと利用者あるいは利用者相互間のコミュニケーションをはかるためにも、広報に対してどんな御意見でもお寄せ下さい。

(K. N)

プログラム相談委員名		
所 属	氏 名	TEL
理学部・地学	河野芳輝	62-4281 (568)
理学部・化学	佐道昭	62-4281 (548)
理学部・地学	松本崧生	62-4281 (568)
医療短大・放射線	小島一彦	62-8151 (494)
工学部・電気	武部幹	61-2101 (331)
・機械	佐藤秀紀	62-2101 (258)
センター	車古正樹	61-2101(291,292)
センター	沼田道代	61-2101(291,292)

**センター** 電話(0762)61-2101(内線)291.292番  
**センター(時間外)** 電話(0762)61-2108  
**理学部分室** 電話(0762)62-4281(内線)536番

昭和49年11月25日 発行

編集者 金沢大学計算機センター  
 広報委員会

発行者 金沢市小立野2丁目40番20号 (〒920)  
 金沢大学計算機センター

印刷所 田中昭文堂印刷株式会社